

SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.09

2018.05



これからは、海からの視点を

Take Free

これからは、海からの視点を – 作家 宮原昭夫 –

文・森 休八郎



辻堂に「山」がいくつかあるのをご存じだろうか。有名なのは、交差点の名称にもなっている浜見山だが、もっとも標高が高いのは、辻堂元町にある天王山だろう。

山というよりは小高い丘なのだが、幾本もの黒松がたかだかとそびえ、春には桜が咲き誇る。頂上には天王社があり、祭神である御嶽山大権現、長崎大明神、大日大聖不動明王の石碑が建つ。その前に立つと、吹き抜ける風の音やさえずる鳥の声が聞こえるのみで、すぐ近くを走る東海道線の鉄路の音ですら、かすかにしか響かないほどの静寂に満ちている。

この天王山の東麓に居を構えて40年になんなんとするのが、宮原昭夫さんだ。1972年に芥川賞を受賞した作家であり、2016年に『コンビニ人間』で同賞を受賞した村田紗耶香さんの「師匠」でもある。

休学、そして文学との出会い

宮原さんは1932年、横浜市神奈川区に生まれた。小学校を卒業後、旧制神奈川県立横浜第二中学校に進学する。だが当時は、戦中戦後という激動の時代だった。在学中に学制改革が行われ、新制中学と新制高校が誕生するのだが、「それがちょうど中学3年の時でしてね、ぼくたちは神奈川県立横浜第二高校(現・横浜翠嵐高校)の併設中学で1年間を過ごし、高校に進学しました」

と、宮原さんは語る。

高校に進学したとたん、宮原さんは肺を患い、休学を余儀なくされてしまった。体を動かすこともままならず、横になることを強いられる日々。両親は「毎日英単語ぐらい覚えたら」と勧めたがやる気にならず、楽しみは読書だけだった。当然

のごとく、この頃に文学に目覚めていった。

「ある時、母に坂口安吾の『白痴』を買ってきてほしい、と頼んだんですよ。ところが買ってきたのは、なんとドストエフスキイの『白痴』。しかも上下巻の下巻だけなんです。しょうがないので読み始めたのですが、上巻を読んでいないから全然わからない。思想とか宗教とか、当時は考える余地もありませんでしたしね。でも一所懸命読んだおかげで、文章のディテールに面白さを感じました」

以来ドストエフスキイにはまって読みふけった、と宮原さんは笑う。

さらに『白痴』は、別のエピソードも生み出した。

「やはり安吾の『白痴』が読みたくて、収録されている文学全集の1巻『織田作之助・坂口安吾・太宰治集』を買いました。ところが今度は、この本で太宰の『人間失格』に出会ってしまった」

もちろん、太宰作品も耽読。それどころか、その傾倒ぶりは半端なものではなかったという。あぐくに、太宰の門人の私小説作家・小山清(1911~1965)に葉書を出してしまった。「若気の至りというか失礼な話なんですが、『私は小山さんのファンではないと思いますが、お手紙出しました』なんて書いたんです」

すると、小山から返事が来た。それには、こう書かれていた。
「生活を荒らさず、静かにお暮しください」――。

「ずいぶん後になってからやっと気がついたんですが、この言葉、1940年に太宰が手紙で小山さんに贈ったものでした。小山さんはそれをそっくりそのまま、ぼくに贈ってくれたんですね」

のち、宮原さんは小山から同人誌『木靴』に誘われ、参加する。文学への扉は、こうして徐々に開かれていった。

小説家を志して

結局、休学期間は4年に及んだ。

「高校を卒業する時は、もう成人になっていました」

ドストエフスキイへの憧れから、早稲田大学第一文学部露文科に進んだ。同時に、少しずつ執筆も始めた。

だが、当時は政治の季節である。

「1960年、まさに60年安保の年に卒業したのですが、当時の文学部自治会は代々木派(共産党支持)と反代々木派で真二つに割っていました。ところがぼくときたら根っからの文学青年で、政治のことは何もわからない。のちの言葉でいう『ノンポリ』ですね。ところがそんなぼくがクラス委員にされてしまった。そうなると、『宮原はどうちにつくんだ』なんて、代々木派も反代々木派も斥候を出してぼくをつけていたくらいでした」

結局ノンポリのままで大学を卒業し、大学院に進んだ。同時に横浜の実家で学習塾を始め、さらに結婚。新婚生活も

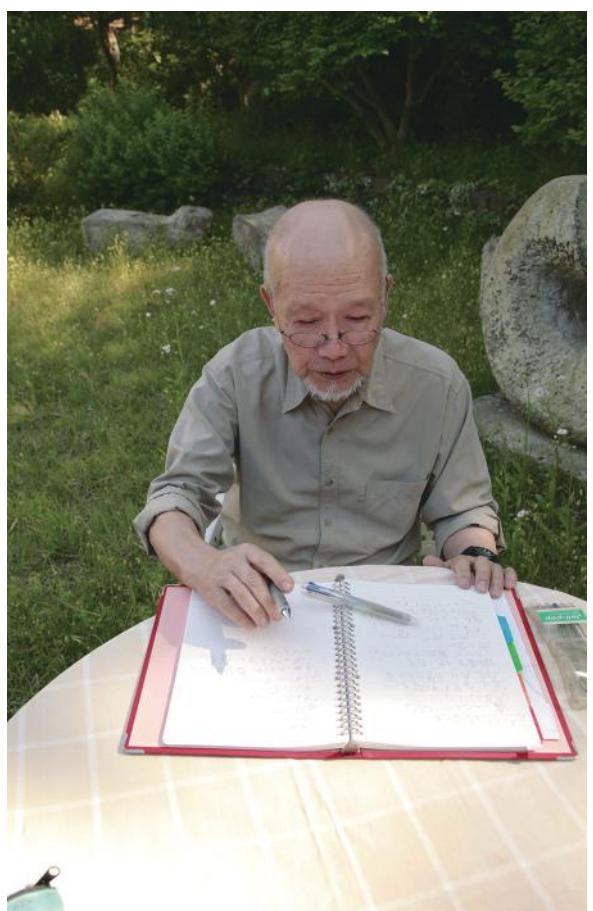
実家の離れでスタートさせた。そして文学修業は続く。

「『人間失格』の影響で、を目指したのは私小説でした。学生時代に一度だけ懸賞に応募したことがありますが、選にはかすりもしませんでした。今思うとただのモノローグを綴っただけのもので、小説じゃなかった。でも卒業後も、せっせと同人誌『木靴』に書いていました」

その『木靴』に連載していた「ごったがえしの時点」が、第1回文藝賞(河出書房新社主催)長編部門の最終候補作3篇のひとつに選ばれる。1962年のことだ。だが受賞はならなかつた。

「受賞したのは、高橋和巳さん(1931~1971)の『悲の器』。ぼくの作品は翌年単行本として出版したんですが、華々しき文壇デビュー、というわけにはいきませんでした」

だが、宮原さんは書き続けた。5年後の1967年、「石の二ンフ達」(『宮原昭夫小説選』宮原昭夫小説選制作委員会に収録)で文学界新人賞を受賞して文壇デビューし、この作品は芥川賞候補にもなった。以後、「やわらかい兇器」「待っている時間」でも同賞候補に挙げられるが、なかなか受賞には至らなかった。



藤沢へ、そして芥川賞

あくまで初心を貫こうと、私小説を中心に書き続ける宮原さん。だがそれは、家庭に軋轢をもたらすことにもなる。私小説では、作家自らの生活を世間にさらすことになるからだ。

宮原さんに、「私小説家の私事」という作品がある(宮原さん著『宮原昭夫評論集—自意識劇の変貌—』言海書房に収録)。主人公の私小説家が妻との生活を作品にしたことでふたりの関係が変質し、崩れていくさまを描いたものだ。



おそらくは同様の葛藤と別れがあったのだろう、作品を発表した1970年に宮原さんは離婚。その後、生まれ育った横浜を離れて藤沢に移住した。

「大学時代の親しい友人が2人も藤沢に住んでいましてね、それでしおりで遊びに来ていたので、全く馴染みがないわけではなかったんです」

最初は藤沢駅南口に、のちに片瀬に住んだ。

「昔NHKに志村正順さんというスポーツアナウンサーがおられましたが、片瀬では、その方が大家さんのアパートに住んでいました。目の前には境川が流れていきました」

そして、大きな転機が訪れる。1972年、ハンセン病の療養所を舞台にした小説「誰かが触った」(『宮原昭夫小説選』に収録)が、芥川賞候補作にノミネートされたのだ。4回目である。だが、期待はまったくなかつた。大学時代の友人を通じて知り合った画家の青子さんと海外旅行の準備を進めている最中だった。

「落選すると思い込んでいましたからね。ぼくの気持ちとしては、『私小説家の私事』のような作品で賞を獲りたかった。だから選考会当日も友達の家に遊びに行っていたんですよ」

ところが受賞が決まった。私小説中心の作家活動だったので、文学界新人賞も芥川賞も、受賞したのは私小説ではない作品だった。

「どこをどう探したのか電話連絡が入って、『記者会見をやるからすぐ来てください』と言うんです。ところが、着ていく服はなんとかあったものの、ズボンのベルトがないんですよ。仕方なく友人のを借りたらそれが長くて、ぼくのお腹を2回りくらいしたんじゃないかな」

さらに大問題が発生した。芥川賞授賞式が、海外旅行の日程のちょうど真ん中にあたることがわかつたのだ。

「スペイン行きを計画していました。旅程の後半には、地中海のイビサ島で結婚式を挙げるつもりだったんですよ」

授賞式には出ねばならないから、やむなく旅程を半分に切り詰めた。夫人の青子さんが、当時のことをこう思い出す。「結局ね、ウェディングドレスを行きの飛行機に持ち込み、トイレで着替えて、機上で結婚式を挙げました。機長さんが司祭役をしてくれて、私たちは乗客の皆さんにシャンパンを振る舞つて。当時は若かったから何も感じなかつたけど、今思えば恥ずかしいですよね」

かくして、芥川賞作家・宮原昭夫の新しい生活が始まったのだった。

辻堂から海へ

宮原昭夫さん青子さん夫妻が今も暮らす天王山東麓の地は、もともと青子さんが育つたところでもある。そして天王山を含む一帯は、辻堂の「北の寺」宝珠寺の寺域だという。「私の父はサラリーマンだったのですが、1949年頃でしょうか、うちで乳牛を4頭飼っていたんですよ」(青子さん)

乳牛は庭から地続きの天王山へと放牧されることもあつた、という。絞った牛乳は業者に納めたが、「余りは4合瓶に詰めて私が近所に配達してました。『牧場の乙女』だったのよ」

青子さんによると、辻堂界隈で当時乳牛を飼っていた家が10軒はあったといふ。さらに、「近所には桃畠が広がっていましたね。うちにも桃の木がありました。田んぼもあって、秋には刈り取った稻を干す『はざかけ』もよく見たものでした」

というから、今では考えられないような牧歌的な風景が広がっていたのだ。

宮原さんが住み始めた70年代になると都市化はだいぶ進んでいたが、天王山がほぼ手つかずの状態で残されたために、静謐な風景はその後もずっと残されている。夫妻はここで執筆に、そして画業に励んだ。

「天王山は地続きなので、庭からそのまま散歩に行けるんですよ」

一方、次第に海とかかわっていくようになる。

「釣りをするようになりました。乗合船もやっている本職の漁師さんと知り合いましてね、じゃあ仲間を募って乗せてもらつて釣りをしよう、と。10人くらいで『釣飲(ちょういん)会』なんてこしらえて、月に1回は魚を釣り、それを肴にお酒を飲んで遊んでいました。釣りとお酒はペアなんです」

江ノ島から鳥帽子岩あたりの沖合に出て、春夏はおもにキスを、秋にはイナダを釣った。

「当時はサバが釣れても外道扱いでしたね。今ではそんなことありませんけど」

そしてとうとう、船まで持つことになった。

「オンボロ木造漁船を、仲間10人と一緒に買ったんですよ。ちょうどその頃、漁船が木造からFRP製に切り替わっていく時期だったので、安くで手に入ったんです。境川に係留していました。ぼくはなんと、船を買ってから小型船舶免許を取る始末でしたね」

名付けて「ロシナンテ号」。そう、かのドン・キホーテの愛馬の名が由来である。

だが、ロシナンテ号は数奇な運命にもてあそばれる。もちろん宮原さんたちの釣りのお供として活躍したのだが、橋脚にぶつかったりして船体の一部を破損。さらには台風などによる境川の増水で再三沈没し、そのたびに引き揚げられていたという。

「ディーゼルエンジンというのは実にタフですね。沈没しても水に浸かっても、オイルで洗うと、ちゃんと作動するんですよ」

こうしたロシナンテ号を巡る珍事件のあれこれ、宮原さん自ら著書『海のロシナンテ』で詳しく楽しく描いている。



海岸文学はあっても海洋文学はない

湘南の風土、辻堂での生活は、宮原さんの作風に影響を与えたのだろうか。

「ぼくが生まれ育った横浜とは、明らかに風土は違います」と、宮原さんは言う。

「作中で湘南とか海辺の街をことさらに描いたことはないんです。でも読者の方からは、『海の空気を感じる』とか言われることが多い。やはり影響はあるのでしょうか」

さらに海遊びの経験が、仕事の幅も広げてくれた。日本各地に残る伝統漁法を体当たり取材して回り、その成果は『生きている海幸彦たち』(日本交通公社出版事業局)となって結実した。

だが一方で、特に藤沢については、文化的な吸引力が小さいのではないかという点を指摘する。

「湘南でも小田原まで行くと、ひとつの文化圏になります。尾崎一雄も住んでいましたし。鎌倉はある意味別格。ところが藤沢は東京にも横浜にも近くて、文学を目指す人間はみんなそっちに引き付けられてしまうんです。意外かもしれないが、藤沢には文学系同人雑誌の数は少ないんですよ」

ではこれから、湘南初の新しい文学が生まれる可能性は

あるのだろうか。こう宮原さんに問うと、こんな見方が返ってきた。

「日本にはね、『海岸文学』はあっても『海洋文学』はないんですね。というのも、日本人には『海からの視線』が欠けているんです」

宮原さんは実は、ロシナンテ号の他にもう1隻、仲間たちと中古の木造漁船を購入していた。こちらにはさはら丸と格調高い名前を付けたが、ロシナンテ号と同じくオンボロの船である。

「まだ40代の頃ですね、この船で平塚から和歌山まで、旅行したことがあるんです」

平塚港を出発し、沿岸を行けるところまで進み、漁港に停泊する。宮原さんたち乗組員はそこでいったん帰り、次はその漁港を出港して西へ向かう——という細切れ旅行で、その珍道中は『さはら丸西へ』(角川書店)という航海記にまとめられた。

「陸上だと、いろいろな標識があるから自分が今どこにいるのかがわかる。でも海に出ると、もちろん海図を頼りに航海しますけど、目で見ると、そこが何という漁港なのかまったくわからないんですね。ある時などは入港してから、『ここは何てところですか』と尋ねて呆れられました」

海上保安庁の基地に入港してしまって恐縮したこともあつたという。

「つまり、『海から陸を見る』という視点が全くないんです。またそれは、こういうこともあります。海辺に建物を作ると、そこから見える海の景色の美しさだけが重んじられますね。でもそういう建物に限って、海から見ると決して美しくない。海からの視線を意識していないんです。ぼくが唯一、海からの視線を意識した美しい建物だと思うのは、横浜税関ですね」

港湾にしてそう、建物にしてそう。ならば湘南発の文学もまた、「海からの視線」を意識するところから生まれてくるものなのかもしれない。

* * *

この8月に86歳となる宮原さん、海遊びはどうに卒業してしまった。

「今はね、2002年に書き下ろした『シジフォスの勲章』という小説の戯曲化を進めています。この作品をお芝居にしたいという人がいましてね」

思いついたことをルーズリーフに書き込み、パソコンで仕上げるというのが執筆スタイルだ。さらに村田紗耶香さんを輩出した横浜文学学校の講師も続けている。講義でも教えている小説の書き方は『書く人はここで躊躇! 作家が明かす小説作法』(河出書房新社)にまとめたが、村田さんの芥川賞受賞を機に、2016年に増補新版を刊行。今も注目を集めている。

「10分も歩くと息が切れるようになっちゃいましたけどね」

と言いながらも、天王山の斜面をゆっくりと踏みしめて登る宮原さん。柔軟な笑顔が木漏れ日の中に浮かんでいた。

「湘南VISION大学開校式」を開催しました!

平成30年5月5日こどもの日、初夏を感じさせる穏やかな天候のなか、江の島ヨットハウスで「湘南VISION大学開校式」を開催しました。地元の湘南はもちろん県外からも含め、120人以上の受講者が集まりました。今回は開校式の前半をレポートします。

- まずは、来賓の皆様から挨拶をいただきました。
- ・増田元秀さん(神奈川県海水浴場組合連合会 副会長) :4月末に、由比ガ浜海水浴場が2018年のブルーフラッグ再認証を取得したとの連絡がありました。ブルーフラッグのように、今後も湘南ビジョン研究所と一緒に活動していきたいと思います。
 - ・中川淳さん(一般社団法人サーフライダーファウンデーションジャパン代表理事) :サーフライダーファウンデーションでも、辻堂海岸で「海の寺子屋」を現役大学生と開校すべく準備をすすめています。「教育が未来を変える、未来を作るのは若者」だと思います。
 - ・五十嵐実さん(湘南クリーンエイド・フォーラム代表) :湘南ビジョン研究所とは、4年前に映画『みんなの海だから』の上映を合同で企画しました。スタッフ皆様の努力の結果で、今日の開校式を迎えたと思います、おめでとうございます。

そして、当研究所理事長・片山清宏からの挨拶です。
「当研究所は大きく2つの柱があります。

1つめは「海づくり」。2016年4月にはアジア地域、日本初のブルーフラッグ認証を、鎌倉市由比ガ浜海水浴場で取得しました。

2つめは「人づくり」。市民大学を開校し、海の環境教育を通して、海の特徴を生かしたまちづくりを進めることです。この大学は6年前から考えていたが、お力ねがない、人がいないという理由で活動が満足に進みませんでした。しかし、私たちには「海を守る想い」が人一倍強く、3年前より再び開校準備を進め、皆で大学を作り本日を迎えました」

そして、開校宣言!

『海をもっと楽しもう』をテーマにした
海がキャンパスの市民大学・湘南VISION大学を設立します
海を守り 未来をつくる人材が育つ「地域の学び場」として
発展することを期待しここに開校を宣言します

平成30年5月5日
NPO法人湘南ビジョン研究所 理事長 片山清宏



NPO法人湘南ビジョン研究所 理事長
片山清宏



司会
片山久美



神奈川県海水浴場組合連合会 副会長
由比ガ浜茶亭組合 組合長
増田元秀さん



一般社団法人
サーフライダーファウンデーション
ジャパン 代表理事 中川淳さん



「湘南VISION大学の特徴は3つです。

1つ目は「体験型授業」であること。机の上で学ぶのではなく、五感を生かして海にふれあうことです。

2つ目は海を専門とするスペシャリストの講師が揃っていることです。

3つ目は、ここで仲間をつくり、卒業後に実践することです。例えば、当大学で学んだことをきっかけに、他の組織で活動して欲しいです。湘南の人口は約100万人、卒業生の目標はこの1%の1万人、そして、卒業生が地域に貢献していただければと。10年後、20年後でも湘南地域で愛される大学となるように目指していきたいと思います」

引き続き、湘南VISION大学の記念すべき1時間目の授業を開講しました。講師は「海をつくる会」事務局長の坂本昭夫さん。まさに最初の授業にふさわしい、「海ゴミ」のお話ををしていただきました。以下、その抄録をお届けします。

江の島港には、2~300人の釣り人が訪っています。昨年9月30日に実施した海底清掃では、釣りのオモリ900個を回収しました。10年前はオモリが1mも堆積しており、8年前はオモリを4000個回収ましたが、ここ2、3年で少なくなったようです。この他にゴミは、タイヤ、パソコン、洗濯機もありました。水上バイクは60kgのフロートを2つつけて陸へ引き上げました。10月6日に行う湘南VISION大学の講義では、ダイバーは港のゴミを水面まで持ち上げて、陸上の方々はゴミを陸へ引き上げます。

ゴミは河川から海岸へ流れて来るもの、信号待ちで捨てられるタバコ、花火、バーベキュー、ハロウィンなど多々あります。先日仙台市で、羽生結弦選手のパレードがありました。その後の様子を見ると、表通りは皆がゴミを拾ってキレイになっていましたが、一歩裏通りに入るとゴミのポイ捨てがすごく多かったようでした。

日本の海岸で東アジア地域のゴミを見つけるとすごく目立ちますが、逆にアラスカの海岸では日本から流れてきたゴミが多いです。どちらも電車の中に外国人が1人いるようなもので、どうしても目立ってしまうのです。日本も大量のゴミを海上に流していることを忘れてはいけません。一方ネパールのカトマンズでは、ゴミ焼却施設がないためにゴミを1カ所に集めて川に捨てています。数十年前の日本も同じでした。

今、分解しないプラスチックのゴミが深刻で、マイクロプラスチックやマイクロビーズが問題となっています。実は練習歯磨きの中にもそれが入っており、イギリスではその規制が始まっています。ストロー、プラスプーン、コンビニ袋など1回しか使わないプラスチック製品は止めて、ゴミを減らしましょう。

最後に——片山理事長の、男気、が魅力だったから私も皆もここまでついてきました。

(文・壱岐信二)



湘南クリーンエイド・フォーラム 代表
五十嵐 実さん



海をつくる会 事務局長
坂本昭夫さん



Information

誰でも参加できる“海の学び場”
「湘南VISION大学」授業第1弾

「湘南浜歩き＆フォトスタン
ド作り～海の生き物を観察
しよう!～」を開催します!

05.27
Sun

「湘南クリーンエイド俱楽部」とコラボして、湘南の爽やかな風を感じながら、引地川から辻堂海浜公園まで歩きます。

波打ち際、砂浜、海岸林の生き物を観察し、ビーチクリーンやビーチコーミングを楽しみながら海岸の魅力を再発見します。浜歩き終了後は、拾い集めた貝殻やビーチグラスで、「世界にひとつだけのフォトスタンドづくり」。お子様もご参加いただけます。親子、ご家族でぜひご参加ください!

日時:2018年5月27日(日)10:00～12:00

場所:国道134号線・引地川沿いの鵠沼橋交差点横(海側)集合

ねらい:湘南海岸の魅力を再発見する。

主催:湘南VISION大学

FB:<https://www.facebook.com/shonanvision/>

HP:<http://shonan-vision.org/>

共催:湘南クリーンエイド俱楽部

FB:<https://www.facebook.com/groups/shounan.beachclean.club/>

対象者:どなたでも参加可能

参加費用:1,000円(保険代含む)

申し込み・お問い合わせ: Facebookイベントページの参加ボタンを押すか、info@shonan-vision.orgまでご連絡ください。

(授業担当者:小林)

*延期又は中止の場合は、FBのイベントページ上又は湘南ビジョン研究所HPでご連絡します。



Let's have fun!
配布・設置していただける
場所を募集しています

誰でも参加できる“海の学び場”
「湘南VISION大学」授業第2弾

Beach Night Picnic @湘南
海岸～海のある暮らしをも
っと楽しもう!」を開催します。

06.09
Sat

湘南の海風に吹かれて夕焼けを眺めながら、ちょっとおしゃれなピクニックをしませんか。はじめましての人、懐かしい友だち、いつもの仲間と。おひとりさまでもグループでもファミリーでも大歓迎です。いつもと一味違う週末を、みんなで楽しく過ごせれば、と思います♪

日時:2018年6月9日(土)16:00～19:00(雨天中止)

場所:湘南海岸公園「平和の像」前

http://www.s-n-p.jp/shonankaigan_park/parkmap/
(藤沢市鵠沼海岸1-17-3)

ねらい:海の新しい楽しみ方を体験する

主催:湘南VISION大学

FB:<https://www.facebook.com/shonanvision/>

HP:<http://shonan-vision.org/>

対象者:どなたでも参加可能。入退場自由、飛び入り参
加歓迎です(^^)

参加費用:500円

持ち物:各自食べたい＆飲みたいもの

※レジャーシート、ランタン、クーラーボックスがある
と便利です。

申し込み・お問い合わせ: Facebookイベントページの
参加ボタンを押すか、info@shonan-vision.orgまでご
連絡ください。(授業担当者:クミ)

*延期又は中止の場合は、FBのイベントページ上又
は湘南ビジョン研究所HPでご連絡します。



**SHONAN
VISION**
Social Magazine

Vol.09
2018.05

PUBLISHER: 片山清宏
EDITOR IN CHIEF: 森体八郎
ART DIRECTOR: 大戸千尋
EDITORIAL STAFF: 片山久美 壱岐信二 小林秀光
COVER PHOTO: 芹川明義

web <http://shonan-vision.org/>
f [@shonanvision
e-mail \[info@shonan-vision.org\]\(mailto:info@shonan-vision.org\)](https://twitter.com/@shonanvision)